Vol. 29
文化学園服飾博物館だより
2016. 4. 1
BUNKA GAKUEN COSTUME MUSEUM NEWS
編集・発行　文化学園服飾博物館

● 文化学園服飾博物館の国際貢献・文化交流‥1
● 2015年度の活動報告…………………… 2
● 特 集 記 事……………………………3
● 2016年度展示のご案内………………… 4

文化学園服飾博物館の国際貢献・文化交流

文化学園服飾博物館では、“「衣」を通して日本と世界の文化を知る”をテーマに日本と世界のさまざまな衣服や染織品を公開しています。また、自館での展示ばかりではなく、所蔵品を国外の美術館・博物館に貸し出すなど、「衣」を通した文化交流にも取り組んでいます。

徳恵翁主の衣装を韓国文化財庁に寄贈

徳恵翁主（1912-89）は、高宗帝の末娘として1912年日本統治下に生まれ、韓国では政治に翻弄された悲劇の王女として知られます。

文化学園服飾博物館が所蔵する徳恵翁主の衣装類約50点は、戦後、帰国できず日本で暮らしていた兄の李垠殿下・方子妃殿下夫妻から、妃殿下のご縁戚にあたり文化女子短期大学・学長を務められた徳川義親氏を介して本学園に寄贈されたものです。

これらの衣装は、これまでも2008-09年に韓国国立文化財研究所の国外所在韓国文化財調査の対象となり、他の収蔵品と合わせて300ページに及ぶ詳細な報告書が刊行されました。また、徳恵翁主の生誕100年となる2012年には韓国国立古宮博物館へ貸し出し展示され、多くの人々が訪れるなど、資料を通じて友好的な関係を築いてきました。

このような交流を経た上で、昨年が戦後70年及び日韓国交正常化50周年という節目の年にあたることから、学術的交流が日韓交流を深める一助になればとの思いから、韓国でも類例がほとんどなく服飾研究資料としても貴重な幼児期の儀礼服を含む７点を寄贈しました。

2015年6月24日に韓国文化院において行われた寄贈式典には、韓国から来日された韓国文化財庁長ナ・ソンファ氏、駐日韓国大使ユ・フンス閣下が出席され、大沼淳文化学園理事長・服飾博物館長に感謝の言葉を述べられました。韓国では寄贈後に国立古宮博物館で記念公開されました。

文化学園服飾博物館が寄贈した徳恵翁主の儀礼服

服飾博物館の収蔵庫で寄贈する衣装を確認するナ庁長

式典の取材に集まった日・韓・米のマスコミに対応する大沼理事長

覚書を取り交わす大沼理事長(左)とナ庁長(右)

寄贈後すぐに韓国で展示された７点の衣装

文化交流事業における服飾の展示

日本の着物は形や文様に特徴があり、日本の文化を外国人に理解していただく入口として、とても分かりやすいものです。文化学園服飾博物館では、これまでに国や民間などが主催するさまざまな文化交流事業において、着物をはじめとする所蔵資料の貸出・展示に協力してきました。今後はオリンピック開催などで文化交流事業がいっそうさかんになることが期待され、服飾博物館でも「衣」を通した交流に協力していきたいと思います。

パリ市主催・「バガテル庭園きもの」展

在ブルガリア日本大使館主催
「日本のきもの」展

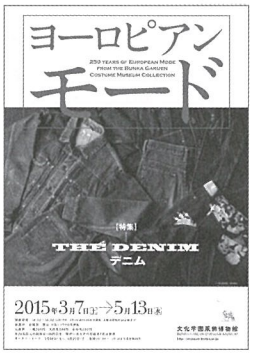
2004年にチリで開催されたAPEC関連行事
「日本のきもの」展

染織資料に関する情報の提供

日本は博物館・美術館の保存環境や展示技術などに関してさまざまな先進の技術・設備を保持しています。文化学園服飾博物館は、服飾・染織品を取り扱う数少ない存在として、長年の経験によって培われた保存と展示の専門的な知識を海外にも提供しています。2010年には東京文化財研究所の企画した海外の学芸員向け研修教材『染織品の保存と活用』の制作に協力し、各国の人材育成に活かされています。また、ファションや染織関係の保管設備や博物館の建設を予定している国外の自治体、団体の視察を受け入れたり、求めに応じてアドバイスなども行っています。

DVD『染織品の保存と活用』より。
当館で撮影された。

ヨーロピアン・モード
3月7日 ～ 5月13日



18世紀のロココ時代から、デザイナーの哲学や感性が作品に強く表れる20世紀末まで、約250年のモードの歴史をたどる展覧会を開催しました。実物資料に加え、本学園図書館の所蔵するファッション・プレートの画像を使用したスライドショーも試み、誌面にみる流行と実物とを照らし合わせてご覧いただきました。また、特集では「デニム」を取り上げ、19世紀の作業着にはじまりファッション・アイコンとして流行をリードするようになった現在までを振り返りました。

衣服が語る戦争
6月10日 ～ 8月31日

第二次世界大戦が終結して70年の節目となる今年、戦時下の「衣」に焦点を当てた展覧会を開催しました。展示は、日清、日露戦争下の明治後期から、第二次世界大戦下と敗戦後の昭和20年代前半までの着物や洋服、本学園図書館の所蔵する女性誌など計約200点で構成し、戦争が人々の衣生活に与えた影響を読み取っていきました。身近な「衣」から戦争を考えることで、戦争の引き起こす日常生活への弊害や、平和な社会のもたらす恩恵を実感できたのではないかと思います。

エピソード
－服が語るひと・こと・とき－
9月25日 ～ 11月25日

服飾博物館が所蔵する日本関係の資料の中から着用者、所有者、使用の機会など由来の分かっている服を選び、紹介しました。江戸時代初めの「大坂の陣」に因む胴服に始まり、明治～昭和初期の近代日本の基礎を作った政治家や財界人の大礼服、華やかな皇族のドレスなど、時代を追いながら、それぞれの時代に起こった歴史的な事象や、その時代に活躍した人々のエピソードと共に紹介しました。教科書や歴史ドラマに出てくる人物が実際に着ていた衣装から、歴史を身近に感じることができたとの感想が多く寄せられました。

魔除け
－身にまとう祈るこころ－
12月17日 ～ '16年2月17日

本展では、魔除けの役割を持つ服飾に焦点を当て、アジア・アフリカ地域を中心に、各民族のさまざまな表現の衣服や装身具、約240点を紹介しました。魔除けのかたちには、それぞれの民族の多様な思考が色や文様などに反映されています。その一方で、目の行き届かない背中や魔の侵入口とされる衣服の開口部に魔除けが多く施されたり、子供の無事と健やかな成長への願いが込められたものが多い、といった共通点も感じ取っていただけたようです。本展は、新聞などでも紹介され、幅広い年代層の来館者にご覧いただきました。

東京文化財研究所と共催し、研究会を行いました。

10月16、17日の２日間、独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所と共催で「染織文化財の技法・材料に関する研究会 ― ワークショップ 友禅染 ―」を行いました。講師には、埼玉県伝統工芸師・桜美林大学 非常勤講師の瀬藤貴史氏を迎え、友禅染の材料、道具、技術などについて講義を行った後、文化学園大学 染色研究室の協力のもと、整った設備の実習室を使い、実際の職人とほぼ同じ作業を２日間にわたって体験しました。無地の半襟地に、下絵描き→ 糊置き→ 地入れ→ 彩色→ 蒸し→ 水元→ 乾燥、の工程を経て作品を仕上げ、受講者の皆さんは自身の作品のできばえに満足した様子でした。講義で「染め」の原理を理解し、また体験によって技術とその保持の難しさが実感できる極めて中身の濃い内容となりました。

糊置き

彩 色

染色理論の講義

講師の実技から学ぶ

外部専門家によるギャラリー・トークを行いました。

８月22日に行われた「衣服が語る戦争」展のギャラリー・トークでは、戦時資料研究家の萩谷茂行氏をお招きし、解説していただきました。参加者約30名と一緒に１時間ほどかけて展示室をまわりながら、展示品を中心とした戦時下の衣服について幅広い視点から分かりやすくご説明いただきました。参加者も気軽に質問ができる雰囲気で、展示品に対する理解もいっそう深まったことと思います。

ギャラリー・トークの様子

『世界の美しい刺しゅうぬり絵』を監修しました。

2016年３月にエクスナレッジから刊行された『世界の美しい刺しゅうぬり絵』は、服飾博物館の所蔵する刺繍の資料を元にしたぬり絵用のイラスト集です。服飾博物館は、資料画像の提供、イラストとした時の文様の正確度のチェック、世界各地域の刺繍の特徴解説など、全般にわたる監修を行いました。世界各地の刺繍の特徴を感じながら美しい図案を完成させる、好奇心をゆさぶる一冊です。

『世界の美しい刺しゅうぬり絵』より　エクスナレッジ刊

提言！ わたしが思う文化学園服飾博物館。

文化学園服飾博物館は今年で開館37年。これまでに160を超える企画展を開催してきました。今回は、各方面でご活躍の方々に、服飾博物館について思うこと、期待すること、自身の活用法など、ご意見をお伺いしました。

面白さ上書き保存中の博物館。

大坪　覚 さん
（『TOKYO 大学博物館ガイド』著者）

大学や専門学校にある博物館を数多く訪問して、いろいろな媒体で紹介しているので、訪れるたびに新しい展示に出会える場所がやはり印象に残りますし、また行きたいなと思わせます。服飾博物館はコレクションの豊富さと展覧会ごとのコンセプトがうまく融合していて、毎年必ず足を運んでいます。たとえばヨーロッパの歴史的なドレスを、異なる角度からアプローチして見せることで、リピーターにとっては面白さが上書き保存されていくことを実感します。いつ見ても照明や展示の位置がビシッときまっているのが、文化学園らしいところですし、展示を熱心に見て勉強している学生さんが多いのも特色です。若い世代の率直な感想を掲示するボードなどがあると楽しいかも。

日本人の「装い」に対する理解が深まる。

シーラ・クリフ さん
（十文字学園女子大 表現文化学部、語学教育セクター　教授）

年２～３回、服飾博物館へ足を運びます。よく調査・研究された興味深い内容の展示は、私に多くの知識を与えてくれます。特に06年の「夏のきもの」展は印象に残っています。湿度の高い日本の夏を快適に過ごすための伝統的な生地や、洗練された抒情的な文様は、日本人の「装い」に対する意識の高さを感じました。また「世界の藍」や「世界の更紗」など技術に焦点を当てた展覧会も面白かったです。世界でそれぞれに発展した技術や文様が、日本にどのように影響をもたらしたかが分かり、日本人のファッションに対する理解が深まりました。
今後も資料の充実をめざし収集を続けてほしいと思います。また、英語の説明文の充実と、コレクションの完全なアーカイブ化も期待します。

記憶を掘り起こす衣服。

西野木 ショーン さん
（書籍編集者）

生地と洋服に溢れた家で育ったせいだろうか、服飾博物館に行くと、他の美術館とは違う、なんだか不思議な気持ちになる。布の流れやボタンの並びに誘われて、その服が生まれたときに響いていたであろうミシンの音の眠れる記憶が、対象への興味や驚きと一緒にやってくる。過去への憧憬とともに、新鮮な喜びを味わえるところがいい。だから、年４回、展示が新しくなるたびに足を運んでしまうのだろう。特にヨーロッパものときは楽しくてしょうがない。とはいえ、あくまでも学生第一の施設。10代の時にここで見た服が美しすぎて羨ましく悔しくて、どうしても自分で作りたくなった。そんな記憶を多くの人に植え付けるような展示を続けてほしい。

もっと新しい時代の作品も見たい！

朝日　真 さん
（文化服装学院　専任教授）

展示が変わるたびに学生と見に来ています。西洋服装史が専門ですが、ジャンルにこだわらず服を見ることは、新しい発見にもつながります。特にヨーロッパと全く価値観の異なるアジアやアフリカの民族衣装はとても新鮮！「世界の藍」や「世界の刺繍」など、同じ技法でいろいろな地域のものを集めて比較した展覧会はとても興味深いし、多くの地域の資料を所蔵している服飾博物館だからできるのではないかと思います。学生たちにとっては、1990年代くらいのファッションはもう「歴史」という認識ですから、その時代のデザイナーの作品も充実するといいと思います。あと、文化服装学院の卒業生の作品を集めた展覧会ができたらなあ。。。学生の刺激にもなると思います。

内容のしっかりした展覧会が印象的。

周防 珠実 さん
（京都服飾文化研究財団　キュレーター）

仕事柄、服飾博物館の展覧会はよく見ています。２年くらい前に開催された「時代と生きる － 日本伝統染織技術の継承と発展 －」展は、日本各地で染織技術について調査され、映像として記録・編集されていたのが印象的でした。このようにしっかり調査をされた展覧会の開催を今後も期待しています。
また、館内で公開されているデータベースは、普段展示されないような貴重な作品も多数拝見でき、私にとって至福の時（？）を味わえます。しかし、端末が人の出入りが多い場所に設置されているため、パソコンに向かいあう私をスタッフと間違えてしまわれる方もいます。もう少し落ちついた場所でゆっくり見られたらなあ、と思います。

ファッションから社会や経済、民族性が見える。

新川 徳彦 さん
（東京造形大学 非常勤講師　artscapeライター）

多くの美術館・博物館に足を運びます。ファッションの美的な側面には疎いのですが、歴史と技術に関心がある私にとって、ファッションとそれを支える染織技術の歴史を、国や地域による特性、社会や経済の歴史とともに解説する服飾博物館の企画は興味深いものばかりです。最近印象に残った企画は「時代と生きる － 日本伝統染織技術の継承と発展 －」展。伝統技術を守るというお決まりの話に留まらず、多様な技術が影響し合いながら展開した歴史や、近代化・効率化の試みについても解説され、勉強になりました。もうひとつは「衣服が語る戦争」展。衣服の意匠、スタイル、素材と戦争との関わりを実物資料や雑誌、文献などによって跡づける展示は、戦後70年に相応しい力のこもった企画でした。

美しく完璧な衣装の着せ付け方は私の基準。

浜田 久仁雄 さん
（神戸ファッション美術館　主席学芸員）

展覧会の企画ごとに見ています。私は神戸ファッション美術館で展示を担当していますが、服飾博物館の展示での民族衣装の研究された確実な着付け、ヨーロッパのドレスのスタイルやバランスの良い着付けなど、服飾博物館の展示こそが私の基準となっています。展示の内容も、研究者や研究機関とコラボして素材や染織技術などを分かりやすく伝えるものもあり、やはり文化学園が研究機関であることが素晴らしいと思います。特に近年は、さらに展示プランが進化していると思います。所蔵品も他館では見られないすばらしいものが多く、今後は、日本を代表する服飾専門館としてお互いにさまざまな協力をし合い、注目される展覧会を企画できればと思います。

服飾研究の成果を社会に還元する展示を。

高木 陽子 さん
（文化学園大学　教授）

展覧会の企画ごとに見ています。私も関わった展覧会「オペラ座の夜」展は、アントワープ HRD・ダイヤモンド・コンクールの受賞作品と服飾博物館所蔵イヴニング・ドレスを融合させ、オペラ劇場風の空間演出の中でのドレスとジュエリーの競演は、まるで別世界のようでした。
私は大学院の授業で展覧会の企画に関する演習を担っていますので、毎回の企画展は教材でもあります。服飾の美しさは、素材や製作技術によるところがおおきいものですが、服飾博物館の展示からは、この部分を知っていただこうとする強い意志を感じます。今後は、大学とも連携し、シンポジウムや図録出版も組み合わせて、文化学園の服飾研究の成果を社会に還元するような総合的企画を期待しています。

貴重なご意見の数々、ありがとうございました。服飾博物館を普段からよく知っておられる方々に改めてお話を伺うことで、気付かされることもたくさんありました。博物館へのご意見・ご要望は、ご来館時にお配りするアンケートにてお寄せ下さい。アンケートは集計し、当館運営に役立てています。（文化学園服飾博物館一同）

2016年度 展示のご案内 ● Exhibition Schedule

～5月17日　＊4/22、5/13 は19:00まで開館
ヨーロピアン・モード

宮廷が優雅な流行を生み出した18世紀のロココ時代から、産業の発達や社会の成熟とともに変化する19世紀のドレス、若者や大衆が多様なスタイルを流行させた20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードの変遷を、その社会背景とともに紹介します。また、特集として20世紀を代表するデザイナー、イヴ・サン=ローランを取り上げます。ディオールの後継者としてデビューした1958年から、活動的で新しい女性の美を打ち出した60年代、現代的なエレガンスを追求した80年代までを振り返ります。

カラコ、ペティコート 1760-70年代
デイ・ドレス 1880年頃
ドレス 1958年 ディオール (サン=ローラン)
ドレス 1970年　クレージュ

6月14日～9月8日　＊8/7、8/21は開館　夏期休館＝8/10～17　6/24、7/15 は19:00まで開館
世界の刺繍

糸と針という簡単な道具で自由に文様を表すことができる刺繍は、古くから世界各地で行われてきました。刺繍の表現は地域や民族、階級によっても異なり、さらに家庭の女性が愛情を込めて作る素朴なものから、専門職人の高度な技術による複雑なものまで多種多様です。本展では、四季の情趣を表現した日本の刺繍、オート・クチュールの熟練の技が生み出すヨーロッパの華麗な刺繍、それぞれの民族で伝承された色彩や文様が表されたアジアやアフリカの民族衣装など、約35カ国のさまざまな刺繍を紹介します。

搔取　朝香宮允子妃所用 明治～昭和初期
サリー インド　19世紀
女性用衣装 ニジェール 20世紀後半
女性用衣装 パレスチナ地域 1930-40年代
上衣 (部分) フランス　バルマン 1957-58年

10月6日～11月30日　＊11/3 は開館　10/14、11/18 は19:00まで開館
日本人と洋服の150年

日本人が洋服を着始めておよそ150年が経ちます。幕末、黒船来航によって人々は自分たちとは全く違った服装を目の当たりにしました。1000年の長きにわたって着物を着続けてきた日本人が、その後わずか150年の間にどのように洋装を受け入れ、今日世界に独自のファッション性を発信するようになったのでしょうか。本展では、明治初期の洋装からパリ・コレクションに進出した日本人デザイナーの作品までを展覧し、憧れ、コンプレックス、アイデンティティの再認など、日本人のさまざまな思いも探ります。

ドレス 明治20年代初め
フロックコート 明治天皇着用 明治時代
ドレス 大正末期～昭和初期
ドレス「リズム・プリーツ」＊ 三宅一生　1990年
＊文化学園ファッション リソースセンター所蔵
コート、ジャケット、パンツ＊ 山本耀司　1983年

2017年1月6日～2月20日　＊2/11 は開館　1/20、2/10 は19:00まで開館
麻のきもの・絹のきもの

縄文や弥生時代の遺跡からの出土品や、『魏志倭人伝』の記録で知られているとおり、日本人は古代より衣服の材料として麻と絹を利用してきました。麻は高温多湿の日本の気候において良く育ち、絹もまた蚕蛾の育ちやすい環境である日本においては、自分たちで管理し身近に手に入れられる材料でした。本展では、麻と絹、それぞれが糸となるところから、織られて布となり、着物になるまでの経過をたどり、それぞれの材料の特色や染織技術との結びつきを見ていきます。

小　袖　江戸時代中期
仕事着：こぎん 明治時代
大正～昭和初期の装い
帷　子 江戸時代後期

＊ 上記の予定は都合により変更されることがあります。

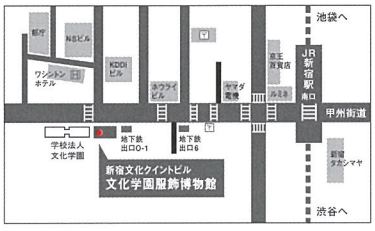
利用案内

◆ 開館時間　10:00～16:30
(各展示会期中２回、19:00まで開館　入館は閉館の30分前まで)

◆ 休 館 日　日曜日、祝日、夏期・年末年始、展示替の期間

◆ 入 館 料　一般 500円・大高生 300円・小中生 200円
＊20名以上の団体は100円引、障がい者とその付添者１名は無料

◆ 交　　通　JR/京王線/小田急線　新宿駅(南口)より徒歩７分
都営地下鉄 新宿線/大江戸線　新宿駅(新都心口)より徒歩４分



文化学園服飾博物館
〒151-8529 東京都渋谷区代々木 3-22-7
TEL. 03-3299-2387
http://museum.bunka.ac.jp

学校法人 文化学園
文化学園大学/文化ファッション大学院大学/文化服装学院/文化外国語専門学校/文化出版局/文化学園服飾博物館